

様式第1号（第3条関係）

【健康あだち21専門部会】会議概要

会 議 名	令和6年度 第1回 健康あだち21専門部会
事 務 局	衛生部こころとからだの健康づくり課
開催年月日	令和6年7月17日（木）
開催時間	午後2時00分 ～ 午後4時00分
開催場所	足立区役所 中央館8階 特別会議室
出席者	別紙名簿の内、15名
欠席者	2名
会議次第	別紙のとおり
資 料	令和6年度第1回健康あだち21専門部会 報告資料

様式第2号（第3条関係）

（審議経過）

松本学務課長より、資料1に沿って説明

（山下）足立区は公立小学校67、中学校35校で23区において一番多い。そのため、学校給食はとても大事だし、給食に関する区の取り組みは本当に素晴らしい。そのうえでいくつか質問をしたい。

1つ目は、給食費の無償化について。単価としては、小学校250～260円くらい、中学生で300円ちょっとと思うが、この単価を上げて、量や質を向上させることは考えているか。

2つ目はアレルギー食について。区内で1,000人くらいがアレルギー対応食を食べているが、この基準は医師の診断書を要するのか、それとも親の申し出のみで対応してもらえるのか。

3つ目はムスリムに対する禁忌食の対応について。今までこういった対応の要請はあるのか。あったとしたら、どのように対応しているか。

最後は給食調理室におけるドライシステムについて。ほとんどの現場で導入されていると思うが、都の報告だと三分の一ほど。実際はどうなのか。

（松本）一つずつ回答していく。まず、給食費については、物価高騰もあるが、今年度から一食14.1円値上げした。お米の値上がりについても話が出ており、今後も随時対応していく。

2つ目のアレルギー食については、必ず医師の診断に基づいて対応することになっていて、アレルギーの対応確認書が必要である。養護、栄養士、保護者が面談をして対応を決めていく。保護者が単純に申し立てをするだけでは、対応できない。また、中にはアレルギーがあっても、子どもがお代わりをしたいという要望もあって、書類

を提出しないという事例もあるということが最近わかった。このあたりは注視していく。

3つ目の宗教関係について、対応ケースはある。給食を一切食べないというパターンが多く、その方たちには給食費無償化と同等の補助金を区から出している。

最後4つ目の調理室のドライシステムについて、改築前の古い学校はドライになっていない所もある。衛生面は、栄養士も含めて立ち入りをしてチェックをして一緒に管理している。

（山下）アレルギー食に関しては、ネグレクトに近い形で病院に連れていかない親もいるかもしれない。それで、診断書がもらえず学校給食において事故が起こると危険ではないかと個人的に考えることがある。

（藤原）給食も多様性の時代になった。今後こういったケースが増えてきた場合、さらに考えていかなければならない問題である。

（馬場（園））魚沼産コシヒカリを給食の日に小・中学校、区立保育園の給食で提供とあるが、私立保育園でもお米屋さんから苗を頂いた時にはお米を育て、収穫して食べることもある。ただ、毎年ではないので、苗の成長を勉強するという意味で動画があれば是非私立保育園にも提供いただきたい。

また、寄贈された魚沼産のお米について、食べ比べ等もしたく余裕があればいただきたい。

（松本）動画については、提供可能である。また、お米については、寄贈とはあるものの、足立区で購入している部分が多い。予算を確認して、検討していく。

（西方）私は田舎育ちである。皆さんは、一粒のお米から何粒お米がとれるかわかる

か。一粒のお米から一本の苗ができ、それが5本くらいに分割する。魚沼産の場合は1つの稲穂から150粒ほどできる。暖かい地域だと180粒ほど。魚沼産だと、150粒×5本で750粒できる。

(松本) 勉強になる。

(片野) 残菜率について聞きたい。これは教員の働きかけによるものが大きく影響すると思うが、教員向けの何か指導要領のようなものはあるのか。

(松本) 先生方の働きかけがあると残菜が少ないのは確かにそのとおりである。お代わりが恥ずかしくなる高学年でも、先生が回って配ることでお代わりができるなど、こういった良い事例を校長会やその他会議を通じて共有していく。

(山崎) 年々低下していく残菜について詳しく聞きたい。竹の塚保健センターの職員と小学校に行き、野菜から食べようという講義をした翌日に残菜が大きく減ったと話を聞いた。こういった取り組みが影響しているのか。それとも先生方の働きかけの影響が大きいのか。

(松本) 一番は先生方の関わり方の影響が大きいと考える。給食時に丸付けをしていたり、生徒が落ち着きなかったとしても関心がない態度をしている学校は残菜率が高い。また、ひと口目は野菜からなど、栄養士が取り組んできたことが実を結んで野菜をしっかり食べていることも残菜率の低下につながっていると感じる。

初鹿野生活衛生課長より、資料2に沿って説明

(藤原) 必ずしもシニアに限らないものだと思うが、そこに銘打っているのは何か理由があるのか。

(初鹿野) 確かに年齢を問わずこういった

問題が起こるケースはあり得る。ただ、急に亡くなったりするなどの問題が発生して飼えなくなるというのは、比較的高齢者の方に多いのが現状。昨日も、親族から急に入院してしまったので何とかしてほしいと相談があった。シニア層において、問題の発生確率と重大化が、より高い状況にある。

網野衛生管理課長より、資料3に沿って説明

(藤原) ないものはしょうがない。

データヘルス推進課長兼務網野衛生管理課長より、資料4に沿って説明

(高田) 訪問看護ということで対象外ではあるが、5人分というのは現在ケアマネも担当が増えている現状なので、可能なのか疑問ではある。持ち帰って共有したい。

土井ころとからだの健康づくり課長より、資料5に沿って説明

(藤原) 野菜から食べるという取り組みについて、私も実践している。野菜がないお弁当の時には、何から食べていいのか迷うこともある。そのぐらい定着している。研究からも、野菜から食べる子どもは野菜の摂取量が多いことがわかっている。これが定着すると文化にもなるし、取り組みとして素晴らしいヘルスプロモーションである。また、以前、孫がおばあちゃんに「野菜から食べなきゃだめだよ」と言った話をこの会で聞いたが、大人の行動を変えるそういったことは素晴らしいと思う。

話は変わるが、三師会連携の事業とはどんなものか。

(山下) 元々は歯周病があると血糖管理が悪くなるといったエビデンスを元にして、歯周病を改善して血糖値も改善させようというもの。健診などで血糖のやや高い方に

歯科の健診無料チケットを渡し、歯周病があれば治療までしてもらい、また内科を受診する。コロナ前から行っていたが、実際にはあまり実績はなく、今年度からまた本格的にやろうと足立区、三師会で検討しているところである。

（倉田）医科と歯科の連携が取れているかという点はまだ取れていないのが現状。歯科受診者で、血圧高そうとか糖尿病かもしれないと思うことがあっても、医科に掛かったほうが良いとはなかなか言えない。睡眠時無呼吸症候群においても、マウスピースを使うよりもシーパップを使った方が早く治るが、医療保険などを考えても医師からの情報提供がないと歯科医からアプローチできない仕組みになっている。そういったことを、医師会の力を借りて、まずは足立区から良い状態にしたいと考えている。

（豊川）男性の推定野菜摂取量について、一般的に若い男性ほど野菜を取らない傾向が全国的に知られているが、やはりそういった感じか。それとも、全体的に低い感じか。

（馬場（区））取り組み前において、子どもの健康実態調査で取ったデータを見ると、やはり若い人の摂取量が少ないことが分かっている。5年ほど取り組んでBDHQの調査をすると30～40代の男性が伸びてきた。これはベジタベを知っている子どもが野菜から食べるよう、野菜を食べよう働きかけをした結果ではないかとみている。一方で、単身の若い男性においては、少ないと思う。6月の食育月間において、そんな方にも届くようセブンアンドアイホールディングスと提携して、野菜が食べられるお弁当をセブンイレブンやイオンで出していただいた。若い人が魅力的なお弁当を買うと、実は野菜が入っているとい

う取り組みを今やっている。

（豊川）たまに足立区でベジタベライフ店に入ると野菜メニューが出てこないこともある（笑）

（馬場（区））委託事業でベジタベ店を回ってもらい、メンテナンスを行っているが、行き届かない部分もある。仕切り直して、そういった店舗が無くなるよう取り組んでいく。

データヘルス推進課長兼務網野衛生管理課長より、資料6に沿って説明

（山下）学校医として質問をしたい。小学校では8割以上の学校で給食後に歯みがきをしていたが、コロナでできなくなってしまい、学校で歯みがきをしたことがない低学年が増えていくにつれて、また虫歯のリスクが増えるのではないかと懸念している。保護者の中には、学校での歯みがきを不安視している傾向もあると聞くが、子どものコロナのリスク状況を考えても、再開しないのはデメリットの方が大きい。

（松本）今、頭を悩ませている問題である。学校にはいつでも再開していい旨を伝えているが、水飲み場が少ないといったハード面の問題やコロナ以外にもインフルエンザなどが流行って、躊躇する学校や保護者が多い印象。今年度も数回にわたってお願いしているところなので、今後増えてくれば良いと考える。

（山下）むし歯の罹患率は良くなってきているものの、23区では最下位付近である。積極的に再開を進めてほしい。

（網野）学校側に諸事情はあると思うが、小学校のうちに歯みがき習慣を身に付けてほしいので、6歳臼歯の健康教室などを通して歯みがきの大切さを先生方も含めて伝えてく。

(藤原)どの学校が歯みがきを推進しているのかわかっているのであれば、インフルエンザやコロナでの学級閉鎖情報と繋げて、それに差がないというエビデンスは出せるのではないかと。公開する必要はないと思うが、教育委員会への情報提供はできる。

(松本) コロナ禍でも歯みがきを続けていた学校はある。そういった情報を共有していきたい。

(倉田) 学校の養護の先生の異動について、足立区内だけではなく外から来る方もいるので、そういった方への引継ぎを徹底してほしい。

(松本) 承知した。周知していく。

土井こころとからだの健康づくり課長より、資料7に沿って説明

(藤原) 中小企業の支援はチャレンジという印象。具体的にどういう課題が合って、そこに区がどのように関わるのか。

(土井) 申込の段階で運動不足なのか食事面のことなのか課題を確認したうえで、区の保健師や栄養士がヒアリングを行い、事業者と共に関わっていく。

(藤原) 個人へのアプローチではなく、経営へのアプローチとなると、経営者に理解させて経営者自身がそういった機会を作るべきではないか。一般的な住民へのアプローチと健康経営は異なるはず。

(馬場(区)) コロナ禍はなかなか表立ってできなかったが、昨年12月にあだちブランド企業50社ほどに対して、成功事例となった区内事業者の方が健康経営のメリットを発表する機会を設けた。例えば、タクシー事業者においては、勤務乗車前に体重測定をすることで食事面での健康意識が高まり体重が減ったり、自動販売機のラインナップが健康志向に変更されたなど。

区としては、こういった情報を多くの中小企業に共有できるよう情報発信をしていきたい。

(吉岡) 事業者ごとに目標があり、それを繰り返し評価して改善していくということか。

(馬場(区))

東大の古井教授による東大方式というアンケートと健康診断の結果を併せて評価する。その中で、申請時に申告のあった課題点を確認しつつ、最終的に会社全体のチームワーク、意欲の向上、欠席率の低下に繋げ、社外から評価されるよう事業者の方と相談しながら行っている。

土井こころとからだの健康づくり課長より、資料8に沿って説明

(藤原) 生活困難者は年々低下傾向にあり、子どもの貧困対策としても成果は出ており、健康状態も改善してきている。更なる生きる力を養っていくためにどうしたらいいか教育委員会の方々含め探っていくために、今年度からも引き続き調査を行っていく。

(遠藤) 子どもたちのスポーツへの関わり方は二極化している。自身で積極的に行うものと、働きかけても出てこないもの。肥満傾向にある子どもが多くなる中で、どのように対応していくべきか頭を悩ませている問題である。

(藤原) コロナ禍を通して肥満傾向に傾いているというのはデータでもはっきりしている。スポーツの効果は大きいので、これからのオリンピック効果に期待したい。

土井こころとからだの健康づくり課長より、資料9に沿って説明

(片野) SOSの出し方教育について、1

02校中100校実施したとあるが、残り2校は実施してないのか。

(土井) 実施の調整で進めたが、2校とは調整の折り合いがつかず、実施に至らなかった。令和6年度からは、全校実施に加え、小5から中3まで毎年度実施する。

(片野) 最近、日本語が読めない在留の生徒が増えている。韓国語、英語、中国語など多言語のリーフレットがあると良い。また、10代の自殺者への対策を強化してほしい。

(土井) 多言語の対応については、今後検討していく。また、次期計画において、子どもの自殺対策は大きな柱として掲げていく予定である。

(藤原) 多言語については、AIなどの活用も考えられる。10代に対しては、今後フリースクールへのアプローチも必要になるかもしれない。